

[特集 | 教育の現場から]

国際インターンシップ2010
—台湾—へ参加して

建築・デザイン学科
益田 信也

はじめに

たまたま廊下で出くわした長谷川学部長と河済学部長補佐から国際インターンシップの引率教員に推薦されたのは、出発予定日の1ヶ月前のことだった。予定していた引率教員の体調不良で代替教員を探しているという。インターンシップ研修期間にはたまたま予定が入ってなかったため、建築・デザイン学科の学生の参加もあると聞き、渋々ながら承諾したものである。

学位論文のまとめにあたり、台湾のフィールドで資料収集を指導した思い出で、それ以来台湾へは渡航していませんので、その後の変容の姿を見るいい機会だと考え直した。

とにかく、期限切れのパスポートの再申請など、海外渡航の準備に取りかかり、どうにか国際インターンシップを実施できたのは幸運だった。経験して気づかされたのは、研修の過去の記録がほとんど残されておらず、準備を含めて参考にするものがなかったということである。事前に知っておけば、日本でも台湾でも意味なく不安を抱くこともなく、しっかりと研修に集中できるはずである。

それにもかかわらず、日台の関係者の協力・支援で研修は滞りなく進み、参加した学生は知識・経験と共に大きな感動を持って帰国している。この国際インターンシップが今後も継続され、さらに発展していくことを心より望んでいるし、その気持ちは帰国後時間を経るにつれて益々強くなる。微力ながら自分にできることは、この体験を何らかのかたちで記録に残すことであろう。

この報告が今後の国際インターンシップ研修に資するものとなるかはいささか心もとないが、以上のような経緯と問題意識からとりまとめたものである。

1. 国際インターンシップとは

国際インターンシップは、平成16年に近畿大学産業理工学部と台湾の国立虎尾科技大学との間に結ばれた学術交流協定を契機に始まった。相互に短期留学生の受け入れを行い、また、台湾において日本人学生を対象としたインターンシップを実施するというものである。したがって、台湾以外での実績は現在のところない。

また、インターンシップとは言っても、日本国内で実施しているインターンシップのように、特定の1企業に1〜2週間研修を継続するというものではない。夏季休暇を利用して台湾での企業訪問を短期に集中して実施するものである。

1週間程度の海外渡航を前提にすると、最初と最後の1日は国外への移動日とし、最終前日を予備日として確保すると、実質4日間の研修期間となる。1日2社程度の研修とすると、研修企業は全部で8社程度となる。この日程を事前に台湾側で企画し、そこへ日本の研修団を受け入れていくという段取りである。授業科目として単位認定されるのは、国内インターンシップと同様である。

平成17年より毎年実施していて、平成21年は新型インフルエンザにより中止となったが、平成22年は5回目にあたる。

国際インターンシップ2010の研修団は、教員1名・職員1名・学生8名の総勢10名で、学生の構成は、生環5名(3年1名、2年4名)、建デ1名(女子3年)、情報1名(2年)、経営1名(3年)である。

ちなみに、台湾からの短期留学生は、平成18年〜平成22年の間で、累計28名(男19名、女9名、大学院3名)にのぼり、逆に日本から台湾への短期留学生は累計でも2名(経営)にしかならない。

2. 台湾と国立虎尾科技大学

飯塚市から台湾の首都台北市までは、札幌市、中国の南京市とほぼ同じ直線距離にある。台湾の国土は3万5千平方キロメートルの面積で、東西144キロメートルの長さにわたり、九州よりやや小さい。中央部に3千5百メートル級の

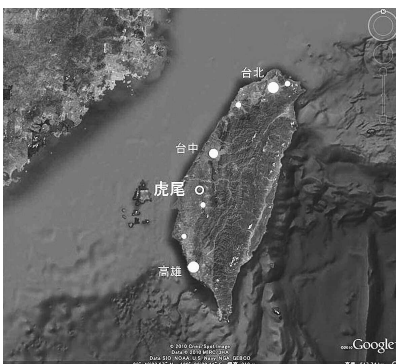


写真1 台湾の国土と都市



写真2 虎尾市街と国立虎尾科技大学キャンパス（左のブロックが学生寮と教職員寮）



写真3 インターンシップ宿舎（左側の2棟が職員寮、右側3棟が学生寮）



写真4 キャンパス近辺の市街地風景

興に重点を置いた時代から、80年代に工業振興に舵を切り替えた台中市の隆盛に比べると、少し取りのこされた感はある。後述する中部サイエンスパークの一翼を担い、高速道路・新幹線等のインフラ整備も進み今後の躍進が期待される。

こうした背景から台湾では80年代から県単位で工学系学部の大学設置が積極的に進められ、雲林県の工学系国立大学として虎尾科技大学は1980年に設置され、現在4学院（学部）19学系（学科）10研究所（大学院研究科）を有するに至っている。

山岳地帯を持つ山地が5割を占める急峻な国土で、このことが産業立地に大きな影響を及ぼしている。

台湾の総人口は約2千3百万人で、九州の人口が約1千3百万人（沖縄県を除く）であることを考えると、その密度の差が顕著である。

西側の平野部に線上に都市の立地が進み、直轄2市の台北262万人、高雄153万人の間に、続く5大都市が、基隆39万人、新竹41万人、台中107万人、嘉義27万人、台南77万人と並ぶ。

国立虎尾科技大学のある虎尾は、台中市を母都市とする都市圏を構成している雲林県の虎尾鎮（町）であり、人口6万8千人・世帯数2万世帯を有する。日本では「トラオ」と呼ばれることが多いが、台湾での日本語通訳では「コビ」と呼ばれている。現地の台湾語では「フーウェイ」と呼ばれることが一般的で、最も良く通じる呼び方である。

虎尾の名は域内を虎尾溪（河川）が貫流することに因んだものであり、この名に関しては、出没していた凶暴な虎の尻尾を切り落として退治した鄭成功の伝承が残っている。

日本統治時代の初期は小さな集落が存在するのみであったが、1896年に大日本製糖株式会社を設置され、台湾における製糖業の中心となった。元々、雲林県や台中市は台湾国内でも肥沃な平野を持つ農業県であった。戦後農業振



写真5 宿舎棟（二重屋根の外断熱を図っている）

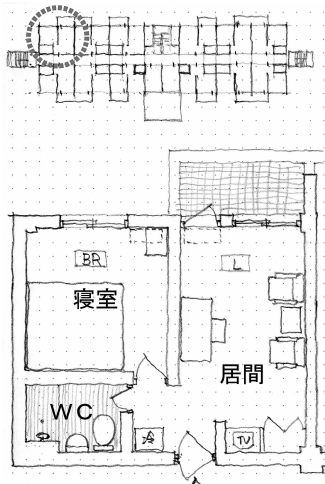


図1 宿舎棟の平面図（上：宿舎棟3階、下：個室）



写真6 宿舎個室（居間）

大学キャンパスは虎尾鎮の市街地の南部に位置し、教育・研究棟のブロックと学生寮・教職員寮からなるブロックの2ブロックから構成されていて、大学関連向けの商店街のある通りを挟んで対置している。

宿舎区と呼ばれるブロックには、3棟の学生寮、2棟の教職員寮の他、サークル棟とグラウンド・バスケットコート、駐輪場、樹林地、ゴミ置場・焼却場等の付属施設がある。インターンシップ研修中は年度の切り替わる夏休みにあたり、実家に帰省している教職員、学生が多いのであろう、日中はサークル棟で新入生の歓迎イベントを準備している学生以外はあまり人影を見かけることはない。近隣に開放されているので、早朝は散歩や体操を楽しむ市民であふれている。

キャンパス周辺は2〜3階建ての長屋（棟続きの建物）が街路に沿って連続するのが伝統的な形態であるが、近年は高層化も一部進んでいる。

表1 国際インターンシップ2010-台湾-の日程

日付	時間	内容	宿泊先
8月29日 (日)	10:00	福岡空港国際ターミナル集合	虎尾
	12:20	福岡空港発 (エバー航空 BR2105便)、昼食 (機内)	
	13:40	桃園空港着	
	14:30-17:00	空港- (高速道路・大型バス) - ○虎尾科技大学	
	17:00-	教職員宿舎 (インターンシップ宿舎) 入寮手続き、休憩	
8月30日 (月)	18:00-	買い物・夕食 (国立虎尾科技大学の案内)	虎尾
	09:00-09:50	朝食 (宿舎近辺)	
	10:00	インターンシップ宿舎発 (マイクロバス)	
	10:20-11:50	①【丸莊食品工業有限株式会社】	
	12:00-13:30	移動 (途中、昼食)	
8月31日 (火)	13:30-14:30	②【台湾電力公司台中發電廠】	虎尾
	17:40-	移動 (途中、おやつ)	
	18:10-20:00	インターンシップ宿舎着、休憩	
	08:30-09:30	朝食 (宿舎近辺)	
	09:40	インターンシップ宿舎発 (マイクロバス)	
9月1日 (水)	10:20-12:00	③【興隆毛巾觀光工廠 (興隆タオル觀光工場)】	虎尾
	12:00-15:20	移動 (途中、昼食) / a【北港朝天宮】 見学	
	15:20-16:30	④【福隆玻璃纖維股份有限公司 (NAG: NITTOBO ASCO Glass Fiber Co., Ltd.)】	
	16:30-17:30	移動 (途中、おやつ)	
	17:30-	インターンシップ宿舎着、休憩	
9月2日 (木)	19:00-	夕食、虎尾中心商店街見学 (国立虎尾科技大学の案内)	台北
	08:00-08:50	朝食 (宿舎近辺)	
	09:10	インターンシップ宿舎発 (マイクロバス)	
	09:15-09:30	⑤【虎尾科技大学】表敬訪問	
	09:30-10:30	【虎尾科技大学】施設見学	
9月3日 (金)	10:30-11:00	移動	台北
	11:00-13:00	⑥【JSR Micro 台湾捷時雅邁科】 (途中、昼食)	
	10:30-11:00	移動	
	14:00-15:50	⑦【漢翔航空工業股份有限公司 (AIDC: Aerospace Industrial Co.)】	
	17:00-19:30	移動 (途中、おやつ)	
9月4日 (土)	19:30-22:00	移動 (途中、おやつ)	台北
	06:30-08:30	朝食、自由行動	
	09:00	ホテル発 (徒歩、市内バス、地下鉄)	
	10:00-11:20	【中正紀念堂】 見学	
	11:20-14:00	移動 (徒歩、市内バス、地下鉄)、昼食、買い物	
9月4日 (土)	14:00-16:40	【國立故宮博物院】 見学	台北
	16:40-18:00	移動 (徒歩、市内バス)、おやつ	
	18:00-20:00	【士林觀光夜市】 見学、夕食、自由行動	
	21:20-	移動 (徒歩、市内バス)、おやつ	
	04:45	ホテルロビー集合	
05:00	ホテル発 (マイクロバス)		
05:45	桃園空港着、出国・搭乗手続き、自由行動		
08:10	桃園空港発 (エバー航空 BR2106便)、朝食 (機内)		
11:20-	福岡空港着、入国手続き、現地解散		

インターンシップ宿舎は、この教職員寮2棟のうちの1棟の最上階3階部分を利用している。国際交流部門の莊賦祥先生も台南の実家に家族を残して単身赴任していて、この宿舎棟の2階に居を構えていると伺った。教職員2名と女子学生1名は個室を、他の男子学生は2人部屋か4人部屋の共用室を割り当てられた。寝室と居間に区分されているので、学生は台湾の学生を交えて居間で深夜まで歓談していたらしい。お世辞にも立派な施設であるとは言えないが、冷房も冷蔵庫・テレビもあり十分快適に過ごせる。寝室にカーテンがないので、夜明けと共に目が覚めてしまう。

シャワーのお湯はいずれの部屋もあまり出ない。しかし、たいした問題ではない。2階にある屋外テラスに洗濯機や物干し場、飲料水タンクの装備がある。洗剤を購入して、研修から帰宅後、毎日洗濯をする学生もいた。日用品は現地調達する方が安上がりで荷物にもならない。初日にまず台湾の学生が近所のスーパーマーケットに案内してくれられた。ほとんどのものは揃う。一方、買い物回りはキャンパスの北にある中心商店街や台中まで出かける

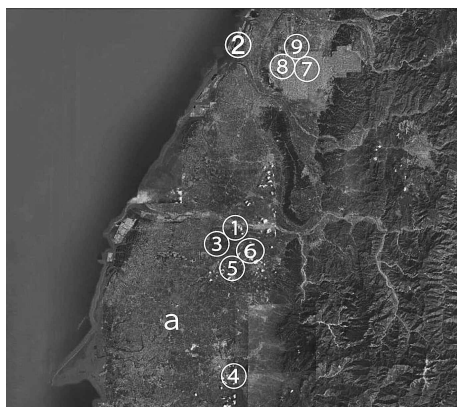


写真9 研修企業の位置 (○付き数字は表1と対応している)



写真8 夕食風景 (日台の学生一緒に)



写真7 現地調達 (スーパーマーケットでの買い物)

学生が多いらしい。

3. インターシップの概要

虎尾を拠点とする国際インターシップは実質4日間である。8時頃出発して、午前1社、午後1社の企業研修を行い、17頃宿舎に戻ることを基本としていて、虎尾鎮から研修企業の所在地までの距離を勘案して企画されていた。

虎尾科技大学からは教職員1名、運転手1名が毎回同行してお世話を頂いた。日によって参加人数は変動するが、台湾の学生も毎日数名同行して通訳と細かな世話をしてくれる。彼らの多くは日本に短期留学の経験（明治大学か近畿大学産業理工学部）があり、その時身につけた日本語能力を駆使して通訳として参加している。この外日本へ短期留学を予定している学生1名も日本語の勉強方々応援に来ていた。いずれの学生も親身になって日本人学生の世話をしてくれる。語学の勉強を兼ねて日本と台湾の学生同士積極的に会話がはずむ。日本国内ではなかなか見ることのできないような、和気藹々とした雰囲気は実に好感が持てた。

また、帰国子女の学生、生物環境化学科2年生・土谷翔君が研修に参加していたことは、偶然とはいえ研修団にとっては大変幸運であった。母親が中国人であるため、彼は中国語を流暢に操れる。インターシップの企業研修中はもちろんのこと、研修の全行程を通じて、通訳としての能力を発揮し、研修団メンバーを支えてくれた。

授業としての公式のインターシップ企業研修は夕刻で終了するわけだが、休憩後日本の研修団に台湾の同行学生を交えて夕食を共にすることを日課とした。20時頃宿舎へ戻るまでは、全くの団休行動となった。朝食も同様である。結果的かもしれないが、全員仲良く団結できたのは良いことだった。

以下、日程を追って、研修の概要を紹介する。

◆第1日目 8月29日（日）（初日）

日本を出国して台湾に入国し、台湾国内をバスで移動して国立虎尾科技大学のある雲林県虎尾鎮へ移動し、インターシップ宿舎へ入寮する1日である。

定刻どおりに集合場所の福岡空港国際線ターミナルに全員集合し、国際インターシップに向けての注意、忘れ物等の確認後、搭乗手続きを行った。事前に任意の海外旅行傷害保険に加入することを申し合わせていたが、未加入だった数

名の学生がいたため、空港において加入手続きを指導した。

海外旅行はもとより航空機に搭乗するのも初めてという学生が多い中、機内持ち込み荷物にハサミを持ち込んでしまった学生がいて取り調べ等に時間をとられた。スタート時点からのトラブルではあったが、逆にこれで研修団が緊張感を持つことができたという方に捉えた。

台湾エバー航空は定刻どおりに発着（12時20分発・13時40分着）した。時差の遅れが1時間あるので、飛行時間は2時間20分程度である。台北桃園空港において入国手続き・両替等を行って、国立虎尾科技大学国際交流部門係長・林中彦先生（飛機行程系助理教授）に出迎えられた。

大学手配の大型バスで、空港から虎尾鎮まで、高速道路を走って約2時間半を要した。台北での晴天は、台中を過ぎた頃から激しい夕立になり、天候の崩れが心配されたが、虎尾鎮に到着した頃は雨もあがり、夕暮れに明かりがぼつぼつ灯り始めていた。

インターシップの宿舎となる国立虎尾科技大学の教職員宿舎に到着後、国際交流部門の窓口担当である陳芑聿助理先生および、大学の学生数名（以前産業理工学部に短期留学経験した者を含む）と合流した。部屋割りや宿舎設備等の説明を受けて入寮手続きを済ませた後、林先生と陳先生は宿舎を後にした。

その後、虎尾科技大学の学生の案内で近くのスーパーマーケットに日用品の調達に行き、続いて近くのレストランで夕食を共にした。慣れないことはや文字、価格にも台湾の学生が大勢でサポートしてくれるので、研修団一同スムーズに台湾での研修生活を始めることができた。翌日のスケジュールと朝食の集合時刻等を確認して、第1日目を無事に終えた。

◆第2日目 8月30日（月）

午前中に虎尾鎮郊外（雲林県西螺鎮延平路）の研修企業「丸莊食品工業」を訪問した。天然醸造と科学的製造技術を併用した醤油商品「丸莊醤油」

で有名であり、創業百年の歴史と伝統を継承している会社である。魚のだしの味がする（ように私の舌は感じる）が、材料は台湾産の黒豆のみで塩以外の一切の混合物はないという。高級食材と



写真10 「丸莊食品工業」研修風景



写真11 台湾電力台中発電所

近年は地球環境問題への配慮から、風力発電や太陽光発電等の再生可能エネルギーによる発電方式にも精力的に取り組んでいて、敷地内に風力発電の風車塔が4基設置されていた。

研修では、まず広報部・王重鎮氏よりビデオで発電所の全体説明があり、次に、館内の展示室を巡回して模型などを活用して発電方法等の詳細な説明を受けた。今回手続き上の問題で発電所施設内の見学は許可されなかった。残念ではあるが、バスで敷地内を一周して屋外から見学を行った。

なお、台湾電力は現在、台湾にある国内唯一の公営電力会社であり、発電から送電、配電に至るまでのすべてを一括して取り行なっている。前身の会社

して取り扱われている。天日干し等の製法は台湾の伝統的な醸造法であるが、品質管理の徹底を日本統治時代の専売公社が全国的に実施し、その良い面が現在に受け継がれているようである。

街の北を流れる濁水溪（河川）の水運を利用した醸造業以外にも多くの産業の集積があり、伝統的な街路建築が建ち並んで魅力的な景観を形成している。近年は文化景観を持つ観光地としての振興も図られている。

会社概要と商品説明のビデオを鑑賞した後、醤油製造用具や醸造中の瓶等を見学した。また、30分程度の体験実習メニューが用意されていたので、実際に大豆を加工・瓶詰めして醤油造りの実習を行った。

移動途中のレストランで昼食をとり、続いて午後から、台中県龍井郷の台湾電力台中火力発電所を訪問した。

台中湾に面するこの発電所は、石炭とガスを燃料とする火力発電所である。出力582万kwは台湾最大の規模であり、火力発電所としては世界最大規模のものである。80年代のハイテク産業の振興を睨んで、電力の大量・安定供給を目的に1975年に計画が着手され、1986年に供給が開始された。鳴り物入りの国家プロジェクトであることは、環境を配慮したデザイン計画と評される発電所の煙突や建屋の意匠にも表れている。また、台中に限らず供給不足が指摘されている台北や台南へも電力を融通することが計画に盛り込まれ、年々発電量を伸ばしている。

設立は、日本統治時代であり、日本人によって着手されている。火力発電所は高い原材料のため、台湾電力は毎年赤字らしい。

滞在中のいずれかの日に虎尾科技大学主催の歓迎夕食会が催されると聞いていたが、本日まで未定であった。研修の帰路にその詳細が大学側より知らされ、宿舎に戻って直ぐ全員正装して歓迎夕食会に臨んだ。宿舎の直ぐ近くの中華レストランの宴会室を貸し切り、虎尾科技大学より莊賦祥教授、林中彦助理教授、陳苒聿助理、河尻和也助理教授（日本人・外国語教員）、林子平副教授の計5名の教職員と学生7名、近畿大学の研修団10名、総勢22名が参加した。意外とくだけたりラックスした雰囲気であった。

この時点では、国立虎尾科技大学への表敬訪問は予定されていなかったため、最後の機会と判断し、夕食会の最後に持参したおみやげ（博多人形とケース）を贈呈した。

◆第3日目 8月31日（火）



写真13 「興隆タオル観光工業」

（後日第4日目に急遽実施されることになった国立虎尾科技大学への公式な表敬訪問の際に、学長よりお礼の言葉があり、ディスプレイされた人形の前で記念の写真撮影を行った。）

虎尾鎮郊外の農村地帯に立地する「興隆タオル観光工場」でタオルの製造過程を見学した。一部ガラス張りになった工場を屋外から見学するしくみである。

かつては世界のタオル工場を誇った台湾も、現在ではその生産拠点は中国に移転してしまい、残る工場はより高級な商品開発を模索している状況である。この会社の商品は贈答品として大都市や海外に輸出されており、その一部の商品を販売して「観光」としているのである。研修中も、個人

写真12 歓迎夕食会（国立虎尾科技大学主催）



写真12 歓迎夕食会（国立虎尾科技大学主催）



写真14 北港朝天宮

や団体で多くの台湾人観光客が買い物に訪れていた。ここでも体験実習メニューが用意されていて、犬の形のタオル製品の梱包を実習した。

午後の研修地は嘉義県民雄郷と距離がある。少し寄り道して、人気の昼食（鴨そば）店と台湾の媽祖信仰の総本山である北港朝天宮の見学が組み込まれていた。台湾人のサービスピ精神の良い例である。建築が専門の私にはうれしい企画であった。

午後の研修企業「福隆玻璃纖維有限公司（NAG）」に到着したのは15時過ぎであった。顧問・長谷川幸一氏および人事部・邱獻弘氏より会社説明が行われた。

日東紡や旭化成等の日本企業が出資した日系の会社である。創業当初は、アメリカ企業と日本企業のジョイント企業としてスタートを切ったが、現在は100%日系企業出資の会社となっている。

そのためか、日本企業の色が濃く、5S活動が積極的に推進されていた。製造製品はガラスを溶かして繊維状にしたグラス・ファイバーを主体に、さらに工程を踏んで織物（グラス・クロス）、銅箔基板、最終的には電子デバイス加工品まで、川上から川下までを一貫して生産している。台湾や日本企業をはじめ世界へ出荷しているが、一部の商品は世界シェア6割を超えるものもあるらしい。機密保持のため工場見学では写真撮影は禁止されたが、工場内はオートメーションを主とした機械設備が充実していた。

質疑応答では、台中を拠点とした理由や中国への進出予定など経営戦略について、日本と台湾の学生よりたくさんの質問があり。理事長・大野敏行氏（日本人）、社長・陳志昕氏が出張先から会議の席に駆けつけて直接丁寧に回答頂いた。マイケル・ポーターの価値連鎖の理論から、国際人としての心構えまで、両氏には熱弁を頂き、日中双方の学生にとって収穫の多い時間であった。

近畿大学の国際インターンシップの受け入れはこれで3回目ということである。社長が虎尾出身ということの後で聞き、ことの外親切であった理由がわかった。また、おみやげに持参したせんべい（もち吉）は、「これは日本人社員で争奪戦になるな」と大野氏にすこぶる喜ばれた。

◆第4日目 9月1日（水）

当日の研修先に出発すべく、いつものように宿舍玄関で待機していると、本日急遽、国立虎尾科技大学を表敬訪問することが決まったと連絡を受け、あわてて正装の仕度に部屋へ戻る。

短い時間であったが、学長・林振徳先生に学長室にて面会しあいさつをする。研究發展處研處長・莊賦祥先生も同席され、全員で記念撮影を行った。

その後、虎尾科技大学のキャンパスを見学する。近畿大学からは生物環境化学科の参加学生数が多かったため、虎尾科技大学の生物科技系（学科）の研究室を訪問・見学した。生物科技系・沈振峯先生より施設説明が行われ、実際に研究室を回りながら研究動向について熱心な質疑応答がなされた。夏季休暇中であるが大学院生は熱心に研究に取り組んでおり、実験中の試料等に至るまで丁寧に説明頂いた。

日照確保よりも日射遮蔽を重視するため、建物間の隣棟間隔が小さいこと、冬の寒気がさほどでないため、廊下は吹き放しで窓ガラスがなく、廊下の至る所に収納棚が所狭しと置かれている状態が日本とは大きく異なる。

また、虎尾科技大学は、雲林県の指定農業試験機関であることから、実際に運用している試験装置についても紹介があった。

パートタイムの学生を含めると約1万人の学生が在籍するため、キャンパスは広く、新しい建物も建設工事中であった。

続いて、虎尾鎮郊外の工業団地にある「JSR Micro Taiwan 捷時雅邁科」へと移動した。中部サイエンスパークの一翼を担う虎尾工業団地は97haと5つの中部サイエンスパークでは最小規模の工業団地である。製品を出荷する企業が台湾の北部と南部の両方にあるため、等距離にある中部に立地選定したらしいが、一方で、人材確保に苦労しているという。

近畿大学産業理工学部には分子工学研究所JSR機能材料リサーチセンターがあり、大変馴染み深い会社であるが、製品についてはあまり認識してなく学生の質問も多岐にわたった。理事長・佐幸順平氏をはじめとする日本人幹部6名も臨席す



写真15 国立虎尾科技大学生物科技系 研修風景

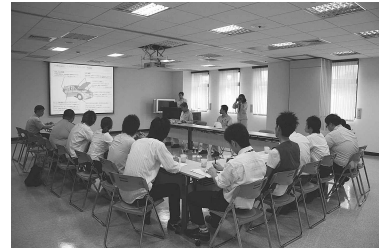


写真16 「JSR」研修風景

るなど、会社の対応は極めて丁寧かつ親切であった。

まず、会議室において会社概要および製造製品の説明が行われた。その後、ヘルメットを着用して、施設内の工場・研究室を見学した後、昼食の弁当を頂きながら質疑応答・意見交換が行われた。本社では液晶ディスプレイ加工製品（着色レジスト、フォトレジストの材料）を製造しているが、他社が追従し難い高度な研究開発力を駆使しながら、技術躍進がすさまじい中国企業を抑えて

マーケット内で優位な立場を維持し続けている。次に、高速道路を走って台中市に向かい、本日2社目の訪問先である「漢翔航空工業（AIDC）」へ移動した。本社は、現在では航空機のパーツを製造するに留まるが、以前は国産の軍用機を製造していた台湾唯一の官営航空機メーカーである。日本の三菱航空機と次世代ジェット製造で契約し、国産旅客機の共同開発を進めているというニュースは記憶に新しい。

まず、会議室にて会社概要・航空機製造工程のビデオ（日本語）を鑑賞し、その後理事長代理・李敏彰氏によって質疑応答の時間が設けられた。また、館内および屋外に本社の歴史館（展示室）が併設しており、その見学過程において、台湾の航空史と詳細な航空機の製造について説明がなされた。

「自国で造る」ことを国策として、戦闘機を部品製造から組み立てまで一貫して実現できる技術力は、1975年からF16戦闘機を4千台製造している実績からも明らかである。さらに強みは低コスト（米仏の約6割の価格）で製造ができる設備・人材を有していることである。魅力的なディスプレイの展示室を時間の許す限り見学して台中を後にした。

虎尾で過ごす最後の夜なので、近畿大学主催の夕食会を提案し、虎尾大学の学生に企画（飲食店の選定・予約）をお願いした。教職員の参加はなかったが、学生は大勢参加し、めったに飲むこと



写真17 「漢翔航空工業」研修風景

はないというビールを飲み干した。

◆第5日目 9月2日（木）

台北に向かう途中で台中に立ち寄り企業研修を行う日程であったので、早めに朝食を済ませて、片付け・清掃等の宿舎の退寮手続きを行う。台北に同行しない虎尾科技大学の教職員（陳芃聿助理先生）および学生と別れのあいさつをして大型バスで出発し、途中で林中彦先生を迎えて虎尾鎮を後にする。この日も晴天であったが、虎尾滞在中はほとんど雨もなく天候には恵まれた。

「中部科学工業園區管理局CTSP」は、国内外約80社の企業が集結する中部工業団地（サイエンスパーク）の管理局である。

農業立国から工業立国へシフトチェンジしてから、台湾ではサイエンスパークの整備を進めてきた。1980年に台湾北部（台北の南）に新竹サイエンスパーク（1372ha）が、次いで1996年に南部の南部サイエンスパーク（1613ha）が、そして2003年に台中都市圏に中部サイエンスパークが、后里（255ha）、台中（413ha）、高等研究（262ha）、二林（635ha）、虎尾（97ha）の5つのベース（基地）で総計1662haで整備されているところである。20年前に台湾を訪れた時に、ちょうど新竹サイエンスパークに電子部分の工場が新設されたのを見学した記憶があるので、まさに隔世の感である。

新竹や南部での経験がすべて中部サイエンスパークの運営に反映され、台湾にある工業団地の中でも成長著しい団地として評価されている。すべての画地が企業で埋められてい

るわけではなく、一部はまだ手つかずの農地が残っているが、高速道路の4つのICと2007年に開通した台湾高速鉄路（新幹線THSR）がある良好な



写真18 中部サイエンスパーク管理局

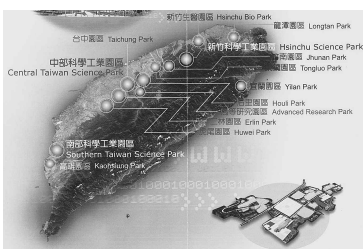


図2 台湾の3つのサイエンスパーク（工業団地）

立地環境は先進の2つのサイエンスパークを追い越す勢いであるという。管理局より、中部サイエンスパークの成立と変遷、現状の概要説明を受けた後、同団地内に立地する「合盈光電科技公司HPB」を訪問した。

本社は、工学と電子を融合した製品、つまり電子カメラやセンサーのレンズ製品を製造しており、主に日本の大手メーカーに出荷している。クラス100のクリンルームは最高級の技術ではないが、低コストの商品を大量に受注する薄利多売が経営戦略である。例えば、パナソニックにレンズ部品を月に5百万個出荷するなど、大量生産を実現するために工場は台湾のみでなく中国でも稼働させている。

会議室にて、会社概要、製品およびその開発状況がスライドを使って説明された。昼休みに社員食堂において、社長・許玄岳氏と副理事長・周正雄氏をはじめ、尾崎俊之氏（日本業務部・日本人）、陳章峯嬢（業務行程部）と共に昼食をとり、その後地下1階の免震空間に設置している製造設備を見学した。

その後、大型バスにて台中を後にし、台北へと向かう。台北での宿泊先である「六福脚棧」ホテルでチェックイン・休憩後、おみやげを買いに免税店へ全員で出かける。ここでも同行してくれた虎尾科技大学の学生が親身になって世話をしてくれて大いに

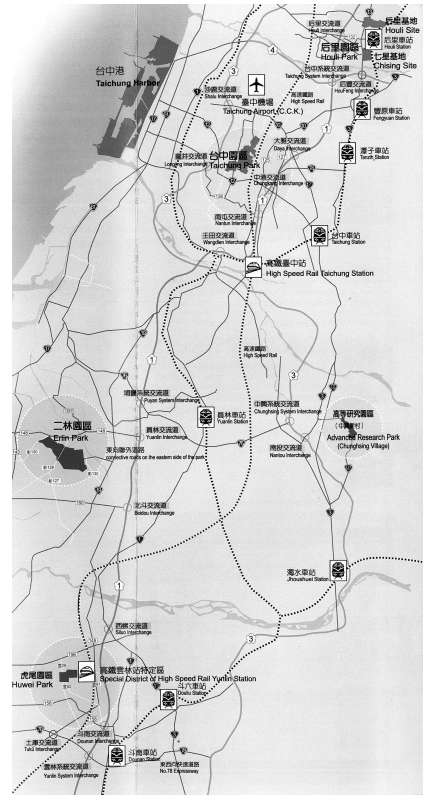


図3 中部サイエンスパーク



写真19 「合盈光電科技」研修風景

◆第7日目 9月4日(土) (最終日)

早朝5時にホテルを後にし、バスにて台北桃園空港へ向かった。寝坊を恐れてそのまま前夜から起きている学生がほとんどであった。定刻どおり台湾エバー航空は福岡空港に到着した。国際線到着ターミナルから国内線ターミナルまで連絡バスにて移動し、インターシッピング報告書の提出・単位認定、必要経費の精算等の諸注意を行い、現地解散した。

おわりに

台湾滞在中に事故も体調不良もなく楽しく研修を終えることができたのは幸運であった。国際インターシッピングの成否の判断は早計であると思うが、このインターシッピングに参加した学生から2名の学生がこの研

助けられた。近畿大学と入れ代わりで訪れる姉妹校アメリカ南イリノイ大学カーボンデール校との語学研修合同サマーキャンプの受け入れ準備のため、同乗してきた林先生とは別れたが、翌日深夜再度訪問頂き丁寧なごあいさつを頂いた。

翌日・翌々日のスケジュールが厳しく、見学時間が確保できそうになかったため、長谷川学部長の薦めもあり、買い物の後夕食の前に「台北101」の見学を強行した。

◆第6日目 9月3日(金)

国立虎尾科技大学・王士嘉先生（国際交流部門・助理教授、台北在住）引率・案内の下、地下鉄とバスの公共交通機関を利用して、台北市内の観光施設を訪問した。

午前中に初代総統・蒋介石の顕彰施設である中正紀念堂、旧市街で昼食後、午後から台湾故宮博物館を見学し、台北一の繁華街である士林觀光夜市で夕食を楽しんだ。



写真20 中正紀念堂

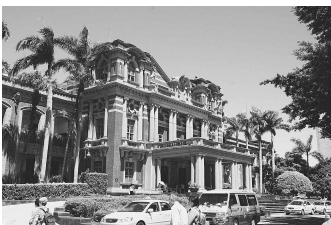


写真21 国立台湾大学医学部

修を契機に国立虎尾科技大学への短期留学を決心し、この春台湾へ飛び立ったことは、ひとつの成果であると喜んでゐる。彼らが台湾で学び、その経験を帰国後に学部へ伝えることは、学部学生にとつても利益は大きい。

最後に、今年2011年は台湾の民国100周年の記念の年である（中華民国が成立した1912年を元年とする紀年法である）。その年に奇しくも日本国では千年に一度とも言われる東日本を中心とした大震災に襲われた。残念ながら、この震災と原発の影響で、平成23年度前期の国立虎尾科技大学からの短期留学は中止となった。予断を許さない状況ではあるが、これにめげず、短期留学・国際インターシップを主体とした国際交流が今後も継続されることを強く望む。

この原稿締切時（5月初頭）において、東日本大震災への義援金が米国、韓国を抜いて、台湾がダントツの160億円もの金額を集めていることに驚きを隠せない。単なる親日を越えた世界情勢や世界経済のグローバル化が背景にあるのだろうか、それにしても興味尽きない愛すべき隣国である。

謝辞

末尾に、インターシップに参加するにあたり、多くの方々にご支援頂きました。長谷川学部長、河済学部長補佐、金子前事務部長、学生支援課真木さん、同荒木さん、庶務課岡村さん他には公私にわたり多大な支援を頂きました。建築・デザイン学科の教員の皆様には、留守中の業務を学科でフォローして頂きました。また、参加した学生8名は台湾現地において大変協力的である上に仲が良く、帰国後も度々同窓会を持つなど、学科を越えて親睦を深めることができました。

台湾においては、多くの企業の皆様に研修訪問を快く受け入れて頂きご丁寧な対応を頂きました。国立虎尾科技大学の教職員の皆様、とりわけ、国際交流部門の林中彦先生、陳芄聿先生、王士嘉先生には、国際インターシップ研修を綿密にご企画頂き、研修団を受け入れて親身にお世話頂きました。同じく、学生の皆様には早朝から深夜まで通訳をはじめとする様々なお世話を頂きました。

ここに記して、深謝いたします。謝辞、感謝!!。

参考文献

- ・ 戴國輝…台湾 人間・歴史・心性、岩波新書、1988
- ・ 司馬遼太郎…台湾紀行 街道をゆく40、朝日文芸文庫、1997

- ・ 酒井亨…「親日」台湾の幻想、扶桑社新書、2010
- ・ 新個人旅行…台湾、昭文社、2010
- ・ 建築知識 緊急レポート「台湾大地震」、建築知識社、1999、11
- ・ 郭永傑…台湾の住様式に関する比較住居論的研究、学位論文、1988
- ・ 文一智…台湾の農村集落における住環境整備計画に関する研究、学位論文、1993
- ・ 荒井久夫…台湾IT産業の構造と発展要因、専修大学社会科学年報、第40号、2006、頁、169-192



写真22 台北101をみる